

2014 - the Year in Review

2014 年の総括

2014 年度は、教育拠点の本格的なスタートから 3 年目にあたります。この実験所は、日本でも特に海洋生物相の豊かな場所に立地しており、その特徴を活かした、より充実した臨海実習や共同利用のために、この教育拠点活動を推進しております。本年度は 5 つの公開臨海実習および 10 の共同利用実習としての臨海実習を行いました。今後、当実験所を利用する方々のより一層の利便性が達成されるよう活動していきたいと考えています。

2014 年度は瀬戸臨海実験所にある理学研究科の海洋生物学分科に修士課程 1 名の大学院生が入学しました。また年度末には、1 名の修士課程の大学院生が修士号を取得し、博士後期課程に進学しました。今後さらに、より充実した大学院運営を目指していきたいと考えております。

当実験所では「瀬戸海洋生物学セミナー」と称して、外来の研究者に講演していただくかたちで公開のセミナーを実施しています。2014 年度は、国立科学博物館、鹿児島大学、黒潮生物研究所、広島大学からの方のご発表をしていただきました。また、奈良女子大学の方の主催で、甲殻類のフジツボ類に関する国際シンポジウム「International Symposium on Barnacle Biology」を開催し、デンマーク、台湾、日本全国から 40 名あまりの人たちが集まり賑やかに行われました。

当実験所では、1949 年より学術出版物として英文の *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory* を発行し、2013 年度より、そのバックナンバーの全論文を京都大学学術情報リポジトリ事業によりオンラインで公開しています (<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/72814>)。本年度は、新たにこの雑誌を紹介する総合的なウェブサイトを立ち上げました (<http://p-smbi.webnode.jp/>)。また 2014 年 8 月に Volume 42 の紙媒体の出版を行いました。これには当実験所の 1 名の教員の論文に加え、実験所の所長を 1975 年～1977 年にわたって務めた故時岡隆博士の遺稿が発見され、これを出版したもの、およびその解説論文、そしてロシアからの 3 本の投稿論文を掲載しました。この雑誌には、出版当初より日本及びその関連する地



域の海洋生物に関する系統分類学や生態学などの自然史分野の重要な論文が、多数掲載されてきました。オンライン公開の順調な運営により、日本のみならず世界中の当該分野の研究者にとっての利便性が向上していると言えます。

当実験所では 2012 年より防災訓練を行っていますが、本年度（2015 年）3 月には南海トラフ大地震がおき、高さ 15 m の津波が発生したという想定のもと、白浜消防署のご指導をいただいて瀬戸臨海実験所に隣接する海拔 30 m の南方熊楠記念館に避難誘導するという訓練を行いました。またそのあと、消火器を用いた消火訓練を行いました。

付属施設である白浜水族館が 22 年ぶりに全面改装され、2013 年 11 月 1 日から約 8 か月の改修工事を経て、耐震化とともに省エネルギー対策も施され 7 月に再開館しました。それにともない、7 月 5、6 日は無料開放を行い多くの入館者がありました。この水族館は、国内では同館にしか展示されていないオオカワリギンチャクなど無脊椎動物が約 450 種約 6300 点、魚類や海藻などを含めると約 750 種約 1 万点にのぼり、国立大学が運営する本格的な水族館として知られています。今回の改修によって、よりいっそう充実した海洋生物の教育啓蒙活動がなされていくと期待されます。

2015 年 3 月 31 日

朝倉彰

京都大学瀬戸臨海実験所所長